

“歌舞伎”を初見した頃

一九六七年(昭和四十二年)卒

田中 俊雄

歌舞伎を観る場所といえば、我々関東在住の者は、東京・銀座というよりは、“木挽町”の歌舞伎座である。

今年は築百二十年とかで、建て替えの噂の真っ只中といったところである。

さて、私が“歌舞伎”というものを初見した記憶があるのは、昭和二十三～二十四年(一九四八～四九年)のことで、おん年四、五歳の頃であった。

銀座の町を四丁目の方から通り抜けた、築地川に架かる橋の袂にあった、“東劇”で歌舞伎を観たのである。当時はまた歌舞伎座が戦災から復興できていなかったためである。(昭和二十六年に歌舞伎座復興)

出し物は、碇を体に巻きつけたお侍(多分義経千本桜の知盛)の芝居と、頭巾を被ったお爺さんの踊りが記憶に残っている。

小さな体のお爺さんが、実に楽しそうに踊りを踊っていたのを覚えている。今にして思えば七代目三津五郎の“傀儡師”であったのだろう。

昨年の末廣会(当代三津五郎の後援会)の新年会で、当代の大和屋に話したが、ただ苦笑されてしまった。

私も気がつけば還暦を乗り越して今年は六十四才、なんと六十年も歌舞伎を見続けてきたわけである。いやはや！！

完